

# 親鸞750回忌法要まで1年

# 西本願寺新門と語る

# 現代に生きる伝統

浄土真宗宗親親鸞の750回忌法要が2011年から12年にかけて営まれる。今年には安芸門徒の地・広島をはじめ、中国地方でもブレ行事が相次ぐ。歴史に根ざした信仰や文化を現代に伝えるには何かが必要か。浄土真宗本願寺派(西本願寺、京都市)の新門大谷光淳さん(32)と、同じ30代の伝統文化継承者である喜多流能楽師大島衣恵さん(35)＝福山市、茶道上田宗箇流若宗匠上田宗篁さん(31)＝広島市西区＝の3人で語り合ってもらった。(聞き手は編集委員・佐田尾信作、写真・今田豊)

## 進路決めるまで

「まだ若い皆さんが日本の伝統文化、あるいは伝統文化という今の道に入るいきさつを教えてください。」

大島 弟が跡継ぎとして無言のプレッシャーを受けて育つ一方、私は気楽な立場で育ちました。ただ、お能は内弟子に入るのも女性はまだ難しく、お能全般を勉強できる場を求めて東京芸術大邦楽科に進みました。そこで自分なりに考えて何らかの形でお能にかかわる仕事をしたいと思い、祖父が元氣なうちに帰郷したんです。

お能が好きでしたから、継がなくてもいいと言われると、やはり寂しかった。母が先回りして進路先を調べてくれた。何にせよ、勉強しておかないと間に合わないという気持ちで頑張りました。

大谷 私は両親から跡を継げと言われた記憶はありませんが、15歳の得度まで、ごく自然な流れでした。その後は外の世界を知りたいという興味もあり、本願寺と関係のない法政大に進みました。その間、「蓮如上人500回忌法要」にも出陣し、最終的には継ぐことを決めたのです。卒業後は龍谷大大学院で真宗学を学び、一昨年、東京の築地別院に着任しました。築地では父に代わって私が法要を勤めなければならず、私自身の意識も変わりつつあります。

上田 自分の本当の力を知りたいと思ひ、お茶の道とは違うバンドやストリートダンスを高校生で始めました。そのため東京に出たいけど、周



喜多流能楽師 大島衣恵さん

おおしま・きぬえ 1974年福山市生まれ。東京芸術大卒業。2歳で初舞台を踏み、98年、喜多流では初めて女性として社団法人能楽協会に登録。

囲を納めさせるため、神職の資格を取る名目で国学院大に進みました。ダンスを10年以上続けてDVDが出たり、海外に招待されたり。「がんばったじゃん、オレ」と言える結果が出て自分に自信が持てたことで、お茶の道に入る

「形」と「型」  
「皆さん方の世界は「形」のないものに価値を見いだす世界。どうお感じですか。」  
上田 文化とは本来「形」があるものではなく、変わってはいけない根幹を残しながら変わったものだけが今



茶道上田宗箇流若宗匠 上田宗篁さん

うへだ・そうこう 1978年広島市生まれ。日本と蔵する五島美術館での研修を経て、2007年から現職。

## 能が好き。勉強の場を自ら求めて 大島さん



百華園から平成の大修復を終えた御影堂(後方中央)をのぞむ。左から大島さん、大谷さん、上田さん(京都市下京区の西本願寺)

## 文化は変わる。根幹を残しながら 上田さん

残っていると思うのです。茶道も村田珠光(わび茶の創始者)のころの形と変わってきているはずですよ。  
茶道は「もてなし」が大切。そのためにお掃除し、道具を選び、最高のお茶を飲んでいただく。ダンスも何カ月もリハーサルし、振り付けも照明も努力を注いで本番をつくっていく。過程は大変だけど、来た人が良かったと言ってくれることで報われる。お茶もダンスも同じ。その人のことを考え、気持ちを伝えることが文化ではないかと思う。  
大島さんは能の「型」を持ち続けてきたゆえの強さ」を語っていますね。  
大島 日本文化は「型の文化」だと思えます。お茶もお能も型があり、根幹にあるものは変わらない。だから創作から入るのではなく、まず型の中に入ることが大事で、それを自分で消化した時、お能なら自分の舞になる、ということがあると思うんです。  
型に入るまでほとんど一生を費やしている感じがありますが、見る方からしたら年齢や経験とともに演者自身は変わっています。結局、舞台はその時代の人その肉体を持って取り組まないと成り立たない。文化はその時代ごとの人の努力や積み上げたもの、それ以外のなものでもないと思います。  
「伝える」のはやはり入りますね。仏教もそうでしょうか。

大谷 浄土真宗では親鸞聖人がお書きになった書物の研究が、江戸時代以降、盛んになりました。それを勉強することで仏教や真宗を知識としてある程度吸収できますが、教えというものは自分自身の生き方の中でこれだけ生かされているのが大切なんです。  
しかし、江戸時代以降、お寺と門徒さんの関係の中でそういう部分が形式的になってしまったのではないかと、という反省があります。たとえば「信心」という言葉について専門用語を使ってあれこれ説明することはありますが、本当は仏教をよりどころにして生きる人の生き方そのものを通して、伝わっていくのだと思います。

## 自分が認められる世界。私利私欲でなく

## 大谷さん

大谷の複数の大学で講義しますが、皆自分のことだけを考えている。個性は大事だけれどお能などで型の中に入っていくことは逆に個性を引き出すことでもあります。「自分探し」という言葉があるけれど、探さなくても自分という

大谷 真宗は家庭生活の中にお教があるという意味で「家の宗教」だったのですが、今は形式的に受け継がれている部分があると思います。本来の意味の「家の宗教」を否定するのではないが、教えがその人の生き方と密接にかかわってくるという意味で、私は「個の宗教」という言い方をしています。  
真宗でよく言われるのは、自己中心性を否定する生き方

大谷 「愛がある限り」というお話が出ましたが、私利私欲ではない部分で、自分自身が認められる世界というものも同時に存在すると思えます。そういう生き方を考えていたんだけど、かけになるのが仏教であり、真宗だと思っています。



浄土真宗本願寺派新門 大谷光淳さん

おおたに・こうじゅん 1977年京都市生まれ。龍谷大大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻単位取得退学。2008年築地別院副住職に就任。

3月に広島市で上演される創作劇「善人なおもて往生をとけ」親鸞わが心のアジャセ」を4日付で特集します。